Russian Literature

文学散歩　ブルガーコフの世界との出会い

『巨匠とマルガリータ』と私

ユリア・ピヒティナ（歌手・女優）

ミハイル・ブルガーコフの小説『巨匠とマルガリータ』は彼の作品の中で、あるいは世界の文学作品の中でももっとも好きな作品の一つです。何度も読みました。読むたびにこの作品の深みは底知れないという感想を改めます。入れ子のように小説のなかに小説があるという構造からしてもう普通のものではありません。

繰り返し読む毎に理解が深まる

『巨匠とマルガリータ』は多層的で複数のジャンルにまたがる作品です。この小説は読者に哲学的、イデオロギー的、道徳的に真剣な疑問を呈します。

小説の中では二つの筋があり、また同時に進行する二つの時間が交錯するという多面的な作品なので、読む年齢でまったく異なる見方をします。私の場合、子どもの頃はこの小説の神秘的な要素に惹きつけられました。1930年代のモスクワに登場する悪魔、それらが巻き起こす血も凍るような、そして想像力を湧き立てる事件の数々など……。

少し成長すると、ソ連社会に対する軽妙な風刺を理解できるようになり、涙が出るほど爆笑しました。そして最近になってやっと、おそらく一番難しい歴史的事件に結びついた複雑な部分を評価することができるようになりました。

この小説は私の人生のまるまる一期間に結びついています。大学時代、勉強のかたわら、「ピルグリム劇場」というスタジオで仕事を始めました。劇場主で芸術指導者であるV・I・ソコロフは、才能ある作曲家であり演出家です。彼はブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』を基にロック・オペラ「巨匠」の制作を完成させているところでした。幸運なことに、私はマルガリータの役に選ばれました。

これは私の最初の役で、役になりきってロックグループと一緒に稽古をし、何もかもがとっても楽しかった思い出です。特に気に入ったのは、華やかで緊迫感があり、かつ叙情的なソコロフ作曲の歌です。このとき私はロックオペラとミュージカルのジャンルに自分の人生を捧げたいと強く思ったのです。

ミハイル・A・ブルガーコフ
Mikhail A. Bulgakov
（1891～1940年）

キエフ生まれ。キエフ大学医学部を卒業し医師となったがロシア革命後の混乱のなかで文筆活動を始めた。1921年にモスクワに行き、新聞の編集に携わりながら短編を発表。1925年最初の長編『白衛軍』はロシア誌に第1部、第2部が掲載されたが同誌の廃刊により全篇の発表はできなかった。しかし『白衛軍』をもとにした戯曲『トゥルビン家の日々』（1926年）はモスクワ芸術座で上演され大成功を収めたが、まもなく上演禁止となった。彼の存命中『巨匠とマルガリータ』は発表されることはなく、病と失明のうちに49歳で亡くなった。『巨匠とマルガリータ』は20世紀のロシアを代表する作品の一つといわれる。

ユリア・ピヒティナ
Yulia Pihtina

歌手・女優。ロシア・イルクーツク出身。私立ピルグリム音楽劇場や国立ザグルスキー音楽劇場でミュージカルやオペレッタの作品を中心に出演し、主演作品多数。2012年4月来日。ロシア民族音楽アンサンブル「GARMOSHKA」のメンバーでもある。

◀ユリアさんの舞台風景／「伯爵令嬢アリツァ」

ロックオペラ「巨匠」が私の人生を変えた

というわけで、ブルガーコフの小説によるロックオペラ「巨匠」は私の人生に決定的な役割を果たしました。初めての巡業もこの劇でした。劇団員と一緒にたくさんの町を回り、自分の国を知り、多くの興味深い人たちと知り合いになりました。そして初めて大人の自立した生活の味というものを満喫しました。この最初の巡業は素晴らしいものでしたが、いろいろなハプニングもありました。

ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』に関わる者には不可思議な出来事や神秘でオカルト的な経験をするという謂れがあります。これは演劇界や映画界では有名な因縁物語で、舞台化や映画化に際してしばしば不可思議なことが実際に起こっています。

私たちのロックオペラもこの運命から免れず、最初の巡業で予期せぬ出来事に見舞われたのです。

ベルゴロドまでの列車では何事もありませんでした。しかし、駅から劇場へ向うマイクロバスに乗ったとき、事件は起こりました。雪の中を走るバスが雪で隠れた大きな穴に落ちてしまったのです。幸い怪我はなかったものの、バスを穴から引きずり出すために、零下30度の極寒の中、私たちは3時間以上もバスから降りて震えながら作業を待ちました。この日、到着後数時間で初演の予定でしたが大遅刻です。やっとバスを穴から出して凍った道を時速140㎞で飛ばしました。凍った雪道を時速140㎞なんて本当に命に関わる危険なことでした。劇場到着は開演数分前、リハーサルどころか舞台装置の設置も間に合わないという状態で、私たちはリハーサルなしで舞台に出ました。出だしはまずまずでしたが、劇の半ばに突然、音響装置が壊れてしまったのです。私たちは当てずっぽうで歌うはめになりましたが、幸運なことに観客は満足してくれてアンコールもありました。

◀ブルガーコフの家博物館の入口のオブジェ

「巨匠とマルガリータ」の挿絵

この事件は、偶然かそれとも『巨匠とマルガリータ』にまつわる因縁だったのかは分かりませんが、主人公ヴォーランドが言うように「事実というのは、この世でもっとも頑固なもの」なのです。

マルガリータと私

女主人公のマルガリータについても話しておくべきでしょう。彼女と共に私の女優としてのキャリアが始まりました。このことは私にとってとても名誉なことです。

マルガリータは知的で美人で、有名な芸術家の妻であり、豊かな暮らしをする30歳の淑女ですが、実際にはひどく不幸なのです。彼女は夫を愛しておらず、自分の存在の無意味さに苦しんでいます。「あの日、黄色い花を持って家を出たのは、わたしについに彼女を発見させようとするためであって、もしそうならなかったら、生活の空しさに耐えかねて毒を飲んで自殺していたに違いない」と巨匠はマルガリータについて語っています。なんと素晴らしい、そして同時に恐ろしい決意でしょうか。

▶「シーザーとクレオパトラ」で主役を熱演

出会いへの期待の象徴である花を持って外に出るとはなんという驚くべきアイデアでしょう。そしてそんな出会いが実際に起きたことにさらに驚嘆します。マルガリータは自分の愛する巨匠に出会ったのです！

私はこの小説の哲学が好きです。例えば、人間は地上の生活を采配することができない。それどころか自身の運命を支配することすらできない、というヴォーランドの思想の背後には何があるのでしょうか？　また、世界の善悪の意味についてヴォーランドの引用の「こういう問題を考えようとはしないのか、もしも悪が存在しないなら、おまえの善はどうなる、もしも影が消えてしまうなら、地球はどういう風に見えるだろうか？」には考え込まされずにはいられません。そして最後にヴォーランドがマルガリータに向けて言う天才的な言葉「どんなときにも、なにひとつ他人に頼んではならないのだ！　どんなときにも、なにひとつ、とりわけ自分より強い相手に頼んではならない」私もこの黄金の掟に従っています。